

「多文化社会とコミュニケーション」愛知県立大学（2020年度）

第13回 「「コミュニケーション能力」ですって？」

あべ やすし abeyasusi@gmail.com

<http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tabunka2020/>

今回は、コミュニケーションを関係性や環境の問題としてとらえなおし、「コミュニケーション能力」という概念について問いなおしてみたい。

ラーニング・コモンズーコミュニケーション、共同学習を促進する大学図書館の試み

現在、タバコに対する社会の認識が変化し、公共空間における喫煙が制限されるようになってきている。飲食店でも「分煙」がすすみ、喫煙者と非喫煙者の空間をわけている。図書館においても、そのように「会話をしてもいい空間」と「だまって本をよむ空間」をわけることで、図書館の利用方法をひろげることができる。たとえば、大学図書館における「ラーニング・コモンズ」の試みは、図書館におけるコミュニケーションや共同学習を促進しようとするものである。

情報の電子化がすすむなかで、図書館の資料も電子化がすすんでいる。多くの学会誌や大学紀要が電子版を公開するようになってきている。また、本は印刷版と同時に電子書籍版も販売されるようになってきている。こうした流れが進行すれば、図書館の蔵書のほとんどが電子化されることになる。そうなれば、大学図書館の存在価値が問われることになる。ただ単に資料を保管し、読書スペースを設けるだけでは大学図書館の利用価値がなくなってしまう。そこで注目されたのが、人的資源である。つまり、図書館という場における学生同士の共同性やコミュニケーションに価値を見いだしたのである。

ここでは名古屋大学図書館のラーニング・コモンズのサイトをみてみよう (<https://lc.nul.nagoya-u.ac.jp>)。

「ラーニング・コモンズの利用方法」のページでは、つぎのように説明している。

ラーニング・コモンズは学習のための会話が可能な空間です。静かな環境で学習したい方は他のフロアをご利用ください。設置PCはメディア教育システムのネットワークに接続されており、サテライトラボのPCと同等の構成です。また、全エリアで無線LAN (NUWNET) が利用できます。

*ヘッドセット貸出可。サービスデスクに申込み (<https://lc.nul.nagoya-u.ac.jp/howto/>)。

また、「学習サポート」というページでは、学生が受けられる学習支援について、つぎのように説明している。

大学院生のサポートスタッフが、パソコンの使い方、調べもののコツ、レポートの書き方などのご質問にお答えし、皆さんの学習をサポートします。中国語・英語での対応も可能です。サポートデスクでご相談ください (<https://lc.nul.nagoya-u.ac.jp/support/>)。

学生同士の交流や共同学習をうながすような空間づくりをするだけでなく、学生が必要とする学習支援を提供している。大学図書館を「学習の場」として位置づけ、設計からサービス内容まで、イチからつくりなおしたのである。

わたしが見学した新潟大学図書館のラーニング・コモンズスペースでは、ファミリーレストランの席（ソファー）のような対面席が設置してあったり、語学練習用のパソコン席が設置してあり、会話したり声をだして練習したりすることができるようになっていた。現在、たくさんの大学が図書館を増改築し、ラーニング・コモンズの導入をすすめている。

愛知県立大学の図書館でもラーニングコモンズのような空間が設置されているが、図書館がせまいがゆえに、のびのびと会話できるような環境にはなっていない。

現在、大学においてこのようにデザインを工夫することでコミュニケーションを促進させようとする取り組みがある。しかし一方では、学生に対して「コミュニケーション能力」を身につけることを要求し、それが教育課題であると主張している状況がある。

なお、「新型コロナウイルス ラーニングコモンズ」でウェブを検索すると、新型コロナウイルスの感染拡大を防止するために多くの大学図書館のラーニングコモンズが利用停止、あるいは限定利用となっていることが確認できる。

「コミュニケーション能力」ってなに？

現在、なぜ学生は「コミュニケーション能力を身につけるべきだ」とされているのか。おそらく、企業への就職を念頭においての議論である。しかし、「コミュニケーション能力がない」「たりない」というのは、なにを根拠にしているのだろうか。その評価は、だれがしているのか。だれなら「コミュニケーション能力」を判定できるのか。コミュニケーション能力のない人というのは、どういう人を想定しているのか。

ここで、貴戸理恵（きど・りえ）による『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに』という本を紹介したい。貴戸はつぎのような問題意識から出発している。

…他者や場との関係によって変わってくるはずのものを、個人の中に固定的に措定（そてい）することを、「関係性の個人化」と呼んでみましょう。学校や職場という、人と人が出会い関係を築いていく場において、私たちはしばしば、「あの人はコミュニケーション能力がある／ない」などの言い方で周囲の人を評価し、「関係性の個人化」を行っています。

けれども、こうした文脈依存的にしか見出すことのできないものを、「能力」という個人化された言葉で表現することは、どのくらい適切なのでしょう。そこに問題はないのでしょうか（きど2011:3）。

いいかえれば、「コミュニケーション能力」というものは「他者や場所との関係によって変わってくる」ものであり、個人化することはできないということだ。だれが、だれと、どのような状況でむきあっているのか。その文脈をはなれて「コミュニケーション」を評価することはできない。コミュニケーション能力とは、性格と同様に環境や関係に左右されるものである（性格については、第1回配布プリントを参照）。

積極的であるべきだ？

現在、「コミュニケーション能力」の向上がさげばれ、自主性や積極性が重視されている。「積極性が強要されている」という、矛盾した状況にある。

仲潔（なか・きよし）は日本の英語科教育で「コミュニケーション能力の育成」が教育目標としてかけられている現在の状況を分析しながら、つぎのように問題を指摘している。

積極的になれない学習者に対し、「積極的になれ」と繰り返しても、効果が期待できないばかりか、むしろ疎外感を覚えたり、居場所を失ってしまったりしかねない。ところが、教育場面である限り、積極的であることが評価の対象となってしまう。そのため、場合によっては、自らの居場所のなさ／居心地の悪さを隠し、積極的／自発的に、コミュニケーション活動／言語活動を楽しむふりをする学習者もいるだろう。あるいは、学習者によってはそのように振る舞うことさえできず、コミュニケーションそのものを遠ざけてしまう危うさもある（なか2012:15）。

そもそも人間には積極的になれる状況と、そうでない状況がある。その場が自分にとって心地よい環境であれば、安心して積極的になれる。しかし、そうでなければ積極的になることはむずかしい。その適応／不適応を個人の問題として、能力の差のようにとらえてしまえば、たまたまその場に適応できている人だけを評価することになってしまう。さらに、じっさいに評価がくだされ「積極的でいいですね」とほめられたり、逆に「もっと積極的にならないと」と声をかけられたりするうちに、その評価を内面化して自己規定してしまうかもしれない。

とくに学校という公共の場で「積極性」を重視するのであれば、各自が「自分なりに」積極的になれる環境をつくっていくことが教育の課題となるのではないだろうか。大学図書館のラーニング・コモンズは、まさに学生同士のコミュニケーションを促進するための環境整備といえるだろう。

また、「聞き上手」といわれるような「引きの態度」も社会のなかで必要とされているのであり、積極的なことだけを肯定するのはやめる必要がある。積極的な人ばかりでは、ぶつかってばかりになる。冷静に状況を把握するような人も必要なのだ。人の話を聞けない人が自己主張ばかりしても、周囲は困惑するだけだろう。

コミュニケーションって、なんだろう

岩川直樹（いわかわ・なおき）は「コミュニケーション教育」という「システム」の問題をつぎのように指摘している。

「コミュニケーション教育」は問題を個人としての子どもの「能力」に還元するばかりか、その「能力」をあれこれの断片的な「スキル」にまで解体する。本来、かかわりや場といった生きた関係から切り離せないはずの問題が、関係から孤立させられた個人の「能力」の問題に還元され、さらに、本来、からだごとがひとつになったトータルな存在の変容にかかわるはずの問題が要素的な「スキル」の有無にまで断片化される（いわかわ2008:5-6）。

人間やコミュニケーションを断片化するのではなく、「かかわりや場といった生きた関係」を問いなおすなかで、コミュニケーションとはなにかという問いをふかめていくことができるのではないかと。岩川は、教育の課題をつぎのように論じている。

いま、私たちに必要なのは、あれこれの一般的な「コミュニケーション教育」の手法を開発普及することではなく、眼の前の子どもたちの現実と向き合うなかで「コミュニケーションとはなにか」、「教育とはなにか」、「社会とはなにか」という問いを掘り下げ、それらのあいだの根源的なつながりを見つめ直すこと、かかわりのなかでなにかを越え、越えることによってなにかを分かち合う「コミュニケーションとしての教育」という実践そのものを、それぞれの持ち場から呼びかけあうことにあるのではないかと（4ページ）。

逆にいえば、「コミュニケーション能力」の向上を教育目標にかかげる議論の問題は、そもそも「コミュニケーション能力」とはなんなのかという問いを回避していることにあるといえる。企業が若者に対して、「コミュニケーション能力をつけなさい」と要求するとき、そこでは反論の機会がうばわれている。若者が企業に対して問いを発するという状況が想定されていない。それは、「評価する側」と「評価される側」を規定し、その関係を固定しているからである。企業が若者に「コミュニケーション能力をつけなさい」と命令することができるのは、自分たちが権力や既得権にぎっているからである。採用面接などでのハラスメントを問題化していく必要があるだろう。面接官は、応募者になんでも質問していいというものではない。

そもそも、コミュニケーションとは、なんなのか。そうした疑問をなげかけることのできる場をつくっていくことが重要なのだといえるだろう。「正解」をみつけることよりも、それを議論することに意味があるということだ。

「コミュニケーション障害」を問いなおす

現在、「コミュ障（こみゆしょう）」ということばが若者のあいだで流行語になっている。「コミュニケーション障害」の略語である。「コミュニケーション能力」と同様に、この「コミュニケーション障害」という概念にも、問題を個人化する視点がふくまれているといえる。

コミュニケーションは、「おたがいさま」である。そのようにとらえてみると、いわゆる「コミュニケーション障害」というのは一方的な議論であることに気づく。たとえば、鯨岡峻（くじらおか・たかし）は「コミュニケーションの障害」を「機能障害」の問題におしこめることに疑問をなげかけ、つぎのようにのべている。

私たちはコミュニケーションの障害を子どものもつコミュニケーション機能の障害として子どもに帰属して考えがちですが、どこまでが子ども「本来の」障害なのでしょう。障害と捉えていることのなかに、子どもと関わる人（自分）との関係が難しくなっていることが含まれていないかと問うてみると、答えにくい場合がしばしばあるのに気づきます。…中略…私たちは暗黙のうちに健常者の機能を基準にとり、それに達している、達していないで「障害」を考えてきていたことが示唆されます。…中略…「コミュニケーションの障害」はもっぱら障害をもつ人の機能に帰属される問題として考えられるべきではありません。むしろ二者の関係が差し当たり難しくなっているという、より広い意味において考える必要があるのではないのでしょうか（くじらおか1998:174-175）。

だれが接するかによって、「その子ども」の行動が変化することがある。それは関係性が両者の行動に影響をあたえるからである。ふだんから接している人と対面すれば、おちついていられる。一方、病院という、日常とは異質な空間で初対面の医師が接するときには緊張するだろう（逆に、医師や看護師は、病院での勤務が日常化することで、病院が異質な空間ではなくなり、緊張感がほぐれていく／うすまっていく）。あたりまえのことだ。しかし、そういった要素をいっさい考慮せずに、ただ「この人はコミュニケーション障害だ」というのは不公平ではないか。そこでは、困難な状況をいっしょに解消するという視点がない。おたがいさまという視点がないのだ。

能力の共同性へ

竹内章郎（たけうち・あきろう）は、「そもそも、能力が個人の私的所有物だ、という感覚自身が疑わしい」とのべている（たけうち2007:131）。そして、竹内は知的障害者や認知症の高齢者の「伝達能力」についてつぎのように説明している。

…知的障がい者や認知症の高齢者も、たとえ部分的にせよ、立派に自分の体調や欲求を、周囲に「伝達」しています。けれどもこの「伝達」は、ふつうの言葉がしゃべれない彼らの言語能力（私的所有物）だけによるものではありません。彼らと接する優秀な指導員による人的サポートがあってこそ、この「伝達」も実現するのです。つまり、こうした優秀な指導員が音声や繰り返される同じ単語から、障がい者たちの体調や欲求を読み取るからこそ、彼らの「伝達」能力が成り立つのです。…中略…優秀な指導員がいるか否か、またそうした指導員を育てる仕組みや社会・文化があるのか否かで、そんな「伝達」する能力は実現したりしなかったりするのです。つまりはこの「伝達」する能力も、個人の私的所有物としてのみあるのではなく、指導員などの他者と知的障がい者たちとの関係の中にあるのです（140ページ）。

竹内は、こうした視点を「能力の共同性」とよんでいる（141ページ）。ここで重要なのは、たがいに協力しあうことによって、そのふたりやグループがどのような関係性をきずき、コミュニケーションをつむぐことができるかということである。

たとえば、肥後功一（ひご・こういち）は「コミュニケーション障害を産み出す見方」という論考で、「“できない（依存）”と“できる（自立）”との間には」「“いっしょに〇〇する（共同性）”という世界が豊かに広がっている」と指摘している（ひご2000:37）。できる／できないを「自分の力」でできるかどうかで判断する視点が、障害を「個人の問題」におしこめてしまうのである（あべ2011、2015）。

完全に依存するのでもなく、たったひとりで孤立するのでもなく、そのあいだを生きるということ。それが可能になれば、生きやすくなる人は、たくさんいるだろう。

「はなしをきく」こと、「いやだ」「たすけて」といえる関係であること

それでは、コミュニケーションにおいて重要なこととはなんだろうか。最低限必要なのは、「相手のはなしをきくこと」、「いやだ」「たすけて」といえる関係であることだろう。

どうすればいいか、わからないときは「どうしたらいいですか？」と相手にきく。

「いやだ」と感じたとき、「それはおかしい」と感じたときは、それをつたえる。表現する。

こまったときは「たすけて」という。それができる関係、環境をつくる必要がある。

積極的にコミュニケーションをすることだけが「いいこと」ではない。必要なときには「コミュニケーションをとじる」こともある。「ひきこもる」のも、ひとつのコミュニケーションである。拒否することがあってもいいのだ。

事故や「ヒヤリハット」を報告しやすい職場環境とは、どのようなものなのか。利用しやすい図書館とは、どのようなものなのか。学生が発言しやすいようにするためには、なにが必要なのか。人数配分や空間の配置をどうすればいいのか。そうした、環境への視点がもとめられる。「個人の能力」の問題にしてしまうのは不公平である。

参考文献

あべ・やすし 2011 「言語という障害—知的障害者を排除するもの」『社会言語学』別冊1、61-78

あべ・やすし 2015 『ことばのバリアフリー—情報保障とコミュニケーションの障害学』生活書院

猪谷千香（いがや・ちか） 2014 『つながる図書館—コミュニティの核をめざす試み』ちくま新書

岩川直樹（いわかわ・なおき） 2008 「コミュニケーションと教育—〈からだ・場・社会関係の織物〉の編み直しの方へ」『教育』7月号、4-11

大和田敢太（おおわだ・かんだ） 2018 『職場のハラスメント—なぜ起こり、どう対処すべきか』中公新書

加藤信哉（かとう・しんや）／小山憲司（こやま・けんじ）編訳 2012 『ラーニング・コモンズ—大学図書館の新しいかたち』勁草書房

神谷悠一（かみや・ゆういち）／松岡宗嗣（まつおか・そうし） 2020 『LGBTとハラスメント』集英社新書

- 貴戸理恵（きど・りえ） 2011 『「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに』岩波書店
- 貴戸理恵 2018 『「コミュ障」の社会学』青土社
- 鯨岡峻（くじらおか・たかし） 1998 「関係が変わるとき」 秦野悦子（はたの・えつこ）／やまだ ようこ編『コミュニケーションという謎』ミネルヴァ書房、173-200
- ショー、ビクトリア（小形恵訳） 2008 『がまんしないで、性的な不快感—セクハラと性別による差別』大月書店
- 竹内章郎（たけうち・あきろう） 2007 『新自由主義の嘘』岩波書店
- 仲潔（なか・きよし） 2012 「〈コミュニケーション能力の育成〉の前提を問う—強いられる〈積極性／自発性〉」 『社会言語学』12号、1-19
- 永嶺重敏（ながみね・しげとし） 2004 『〈読者国民〉の誕生—明治30年代の活字メディアと読書文化』日本エディターズスクール出版部
- 中村高康（なかむら・たかやす） 2018 『暴走する能力主義教育と現代社会の病理』ちくま新書
- 肥後功一（ひご・こういち） 2000 「コミュニケーション障害を産み出す見方」大石益男（おおいし・ますお）編『改訂版 コミュニケーション障害の心理』同成社
- 平田オリザ（ひらた・おりざ） 2012 『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書
- 藤田康文（ふじた・やすふみ） 2008 『もっと伝えたい—コミュニケーションの種をまく』大日本図書

問いかけ

・授業で「グループワーク」などというものがあるが、お膳立てをして強制的に話しあいをさせることにどのような学習効果があるのか？ 授業内容が刺激的で中身のあるものであれば、授業のあとの帰り道などに、グループワーク的な意見交換がはじまるのではないのか。グループワークは、教育実践として成功しているか。（1年生は未体験なわけですが）

・遠隔授業でのグループワーク、ペアワークはどんな感じ？

・SNSや携帯電話による連絡手段は、コミュニケーションツールとして広く普及している。ラインやツイッター、そのほかのSNSや掲示板を利用することに、どのような長所、短所があるか。よかったこと、トラブルになったことなど。

コメントの紹介

今回の授業資料の「ことばは人と人をつなぐが、同時に、ことばが通じない人をとおざける。」という言葉が印象に残っている。私はドライブスルーのあるカフェでアルバイトをしている。店頭のレジで対応する際には表情を見ることができたり、メニューを指さして注文できたりと、ことば以外のツールを活用することができる。しかし、ドライブスルーではそうはいかない。お互いの「ことば」しか頼れるものがない。画面にメニューボードを表示するのだが、お客さんが「あの右上のやつ」と頼んでも、私に見えているのはメニュー名が並んだレジキーだけだ。それに加えて、現在の新型コロナウイルス対策でお客さんも店員もマスクをしており、お互いの声が聞き取れない。唯一のツールである「ことば」も脅かされている。ことばが人と人をつなぐにはことばだけではいけないのだと思う。ことばが通じる人でも、お互いの「伝えよう」という意識がなければ人と人をつなげることはできない。声しか聞こえない状況でもわかりやすいように言い方を工夫して伝えてこそ、「ことば」なのではないか。また、店員にタメ口で話したり、「カフェモカ。」とだけ言い放ったりするお客さんもいる。そのような人たちも「ことばが通じない人」であると思う。相手からすれば、店員が「ことばが通じない人」であるかもしれないが。私はこのような場合は、無理に分かり合おうと思うことができない。心を無にして対応するしかない。このように人と人をつなぐのは「ことば」だけではないと思う。どんな相手に「ことば」を伝えるときでも、相手への思いやりを忘れないでいたい。

①私は韓国ドラマを見るのが好きです。いつも日本語字幕で見ている、時々日本語吹き替えで見る時もあります。日本語吹き替えで見る時に疑問に思うことがあります。韓国語の方言を話している登場人物の吹き替えは必ず大阪弁であるということです。なぜ大阪弁なのか、大阪弁が日本の方言の象徴なのか。また、韓国語にも方言は複数あるのに、なぜすべての方言が大阪弁1つで吹き替えられるのか。この吹き替えは、方言を製作者側の主観でつけてしまっているように感じます。視聴者にわかりやすいためだとは思いますが、私には不自然に感じられてしまいます。他の言語についてもあることなのでしょうか。…

…ら抜き言葉に違和感を抱く感覚は分かります。「食べれない」より「食べられない」と言ったほうが納得します。しかし、帰ることができないことを「帰られない」、走ることができないことを「走られない」と言うのは違和感があります。私は日本語（ここでは包括的に日本語と言わせていただきます）のネイティブスピーカーであるはずで、ということとは、私が生得した日本語はら抜き言葉だということでしょうか。…

【あべのコメント：「帰られない」「走られない」は文法的に誤用です。いわゆる「過剰修正」(hypercorrection)。誤用をしないように注意しすぎて、表現を間違えてしまうということがよくあります。苦手意識のあることばでよく見られる。フランス語話者が異言語をはなすとき語頭の「h」の発音に注意しすぎて存在しない「h」を追加するとか。】

…フォリナー・トークについて。私は、コンビニでアルバイトをしているのですが、外国人のお客さんへの対応は、できるだけ大きい声ではきはきと、短い言葉で話すように心がけています。例えば、「ポイントカードはお持ちでしょうか。」を「ポイントカード、ありますか。」や、「レジ袋はご入用ですか。」を「袋、いりますか。」という感じです。以前、自分がアメリカのスターバックスに行ったとき、店員の方がメニューを指でさしながら丁寧に説明してくれたことが非常に好印象だったので、自分も外国人の方にはより丁寧な接客を心がけるようにしています。また、外国人の方だけでなく、コンビニは老若男女問わず、多くの人を利用するので、お客さんによって対応の仕方を変えることも必要だと思っています。高齢者の方にはゆっくり聞き取りやすく話すなど、同じ日本語話者への対応でも一人一人にあった対応を心がけています。今は、コロナウイルス対策でレジにビニールシートが設置されている上、自分もお客さんもマスクをしているので、声が聞き取りづらく、スムーズに会話ができないことがあります。なので、よりいっそうお客さんの対応の際にはゆっくりきはきはきと話したいと思っています。

…社会で現に「正しいことば」として使用されていることばがある以上そのような言語教育を変えることは難しいのではないかとも思った。例えば受験や就職の際の面接では「正しいことば」を使って話さなければ話の内容に関わらず落とされてしまう。それは社会で「正しいことば」とされていることばを使えなければ生活していけないことを意味している。また、「正しいことば」を使えないことで社会から排除されてしまうということでもある。社会に出て「正しいことば」を使うことができないということは恥ずかしいことだとされる。したがって親や教育者は「正しいことば」を教え、それを日常的に使うことを子どもに強いる。確かにことばは現実の実態ではないので何が正しくて何が間違っているのかということとは誰にも決められないが、社会的に「正しいことば」が規定されてしまっている以上「正しいことば」を言語テストなどによって身に付けさせる言語教育をやめるのは不可能だと思う。

【あべのコメント：そうでしょうね。書きことばの規範、言語テストの正誤判定の基準で人の話しことばをダメだしするようなのは、いきすぎた規範主義だということです。学校の「テスト」というのは、就職という「ゴール」によって大きく規定され、学習内容さえも就職というイベントに規定されている面があります。そのうっとおしさ、不当性を考えることも、大学での学びとしては必要なことだろうと思っています。第13回、第14回のテーマです。】

…今回の資料を読んで、小学生の頃テストで「～してる」と書いて、バツをつけられたことを思い出しました。そういう場合は「～している」と書くべきなのだと思いましたが、今、社会言語学の観点ではそのバツという採点が正しいものであったのか考えると微妙です。とはいえ、マルをつけるわけにはいかない気がします。…

【あべのコメント：書きことばのテストで「してる」を許容しないのは、それほどおかしいことではないでしょう。】

たしか「病院に通訳がいたらいいのにな」という動画だったと思うのですが、医療通訳についての授業をやったときに「ふつう医療通訳者は患者さんの後ろに立つ」とありました。そのときに立ち位置まで決まっているのはなぜなのだろうかと思いましたが、その答えを見つけることができませんでした。しかし、今回のプリントの「第三者返答」を見て、これが関係しているのかもしれないと考えました。医師と話し治療を決定するのは患者さんですが、医療通訳の方が隣などにいると通訳者と話すようになってしまうかもしれません。それを防ぐために後ろに立つことが決められているのだろうかと思いましたが、介助者ではなく障害者と話す際は直接本人と会話するとともに、自分が介助者となったときでも自然に工夫できるようにしたいです。

…高校までは、アメリカ英語の先生の授業しか受けたことがなく、大学で初めてイギリス英語での授業を受けました。それまでにイギリス制作の映画を観ている時に、「この単語は何でこんな発音なんだろう」と思って軽く調べていました。しかしその映画を観た経験がなくイギリス英語での授業を受けていたら、変な発音をする先生だと思っていたかもしれません。どれが正しいというわけではなく、英語にも色んな種類があることを知っていて良かったと思いました。

通訳者が必要な人に対して、その人ではなく通訳者に話をしがちであるということについて、確かにそうだなと思った。それはやはりその人には伝わらないだろうと思っているため手間を省こうとしているのだと思う。それは本人からしたら失礼な態度である。そこで、海外の有名人が日本でインタビューを受けるときのことを考えてみた。例えば海外アーティストが日本の音楽番組に出演したとする。ここでは主役はもちろんアーティスト本人なので、通訳者は後ろで身を隠すように通訳してアーティストに伝える。ここではどうせ伝わらないから、と通訳者に向けて話しかけることはない。つまり、このような通訳を必要とする人が有名人で、誰から見てもこの人がメインだと思われれば、直接話してもらえ。だが、普段の生活の中で介護されている人と、代わりに話してくれる人が一緒に現れたとき、私たちは会話をする本当の相手を重要視しなくなる。私たちは改めて誰に聞いているのか、誰と意志の疎通をしたいのかを考えながら人と接する必要があると思った。…

今回の授業資料で、英語の多様性から“Englishes”と表記されることもあるという記述がありましたが、高校生の時に“Singlish”や“Hinglish”といった概念があるということを知ったのを思い出しました。前者は「シンガポールで話されている英語」、後者は「インド(ヒンドゥー語圏)で話されている英語」を指しています。その文章中ではそれぞれの国の文化として違いが容認されてきていると言われていた覚えがあるのですが、調べてみるとどうやらそうでもないらしく、例えばシンガポール政府は“Singlish”をやめよう、正しい英語を話そうというような呼びかけをしている(参考文献にある“Speak Good English Movement”というサイトはシンガポール政府によって行われた正しい英語を話そうというキャンペーンのサイトです)ようです。他にも、“Engrish”という、日本語話者がRとLを混同して発音する様子を揶揄する表現があることがわかりました(参考文献にはそれでも“Janglish”や“Jaglish”よりはニュートラルな表現であるとありました)。このように、「正しい」英語ではないことを揶揄するような意図の表現がある一方で、「正しさ」から逸れたからこそ、“Singlish”などはわかりやすく簡単にアレンジされており使いやすいと紹介しているサイトも検索してみるといくつか出てきました。私自身は大学でネイティブに近い発音やアメリカ・イギリス英語の文法を学んだりしている身ですが、異なることは必ずしも悪いこととは限らないのかもしれないと思い直しました。

参考文献：Jayne Hildebrand IKESHIMA. 2005. “Some Perspectives on the Phenomenon of “Engrish”” The Keiai Journal of International Studies, No. 15: 185-198

https://keiai.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_action_common_download&item_id=435&item_no=1&attribute_id=19&file_no=1&page_id=13&block_id=21

原田 慎一 2009 “The roles of Singapore Standard English and Singlish” 情報研究 (40), 69-81

https://bunkyo.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_action_common_download&item_id=3081&item_no=1&attribute_id=37&file_no=1&page_id=29&block_id=40

“Speak Good English Movement”(最終閲覧日:2020/7/25)

<https://www.languagecouncils.sg/goodenglish/>

動画内で英会話やALTの日本人が思い浮かべる教師・講師像について話されていたので、私は英会話教室のウェブサイトにも注目しました。オリコン顧客満足度英会話スクールランキング上位のイーオン、Gaba、ECC外語学院、ベルリッツ、NOVAのウェブサイトそれぞれ調べました。各社のウェブサイトには、講師紹介やビジネス英語コースやオンライン英会話コースの紹介などに多くの写真が使用されていました。それらの写真を見ながら分かったことは、予想通りですが白人の被写体が圧倒的に多いということです。講師としてだけでなく留学先の友人としての写真に白人が多く起用されていました。各サイトで黒人は一人見つけられただけで、ほとんど起用されていないといってもよいことがわかりました。また、有名なフリー素材のサイトである、いらすとやで「英会話」と調べてもヒットするのは白人講師のみです。このような現状から日本人の英語学習のターゲットのニーズが白人であることがうかがえます。また、なまりを除いた標準の言葉(いわゆるきれいな言葉)を第一に学ぶべきという日本人の考え方が表れていると考えました。このような固定概念を根底から変えることは難しいかもしれませんが、英会話を行う企業側もなまりやスラングなどの言語のマイノリティから目を背けてはならないと考えました。様々な人種の人々を広告に起用することも言葉や人を除外しないための一つの方法なのかな、と考えました。

参照：オリコン顧客満足度英会話スクールランキング https://juken.oricon.co.jp/rank_english/search/?utm_source=yahoo&utm_medium=cpc&utm_campaign=Rank_English-001&yclid=YSS.1000115723.EAlaIQo_bChMlgYTi06TI6glVRMEWBR3u-Q7tEAAYBSAAEgKbJfD_BwE

いらすとや 英会話 <https://www.irasutoya.com/search?q=%E8%8B%B1%E4%BC%9A%E8%A9%B1>

動画内で触れられていたALTの講師についての話ですが、自分が高校生の時はフィリピン人の先生がALTをされていましたし、中学生の弟は今のALTの先生はサウジアラビア人の方だと教えてくれました。知り合いのスリランカ人の母親がALTをやっていたという話も聞いたことがあります。また、大学生がよく受験するTOIECの試験においてもリスニングパートはアメリカ・カナダ・イギリス・オーストラリアの4か国のスピーカーが担当しており、それぞれの国に特有の発音(訛り: accent)でスピーキングを行っているようです。グローバル化が進み、世界中の国で第2言語として英語を話す人がたくさん増えてきている現代社会において色々な国と人と英語でコミュニケーションがとれるように、アメリカ英語のみにとどまらず様々な国の方が話す英語に触れようという傾向がみられるのではないかと思います。…自分がいざ転校したときに委員会で休み時間のことを放課と言ってしまい、「え！火をつけるの！？」と友達に言われたことがありました。…

・「やさしい日本語」や「フォリナー・トーク」について理解するため、野田尚史「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へー母語話者が日本語を使うときの問題としてー」という論文を読みました。その中で特に重要だと思った本文を以下に引用します。

【引用】

「やさしい日本語」の議論は言語的な面が中心になっている。しかし、さまざまな非母語話者にとってわかりやすい日本語にするためには、狭い意味では言語的とは言えない次の(15)から(17)のような情報伝達の面を十分に考える必要がある。

(15) 伝達手段：身ぶり、現物提示、記号・図表・イラスト・写真・動画の使用など

(16) 伝達様式：情報を伝える順序、文書のレイアウトなど

(17) 伝達内容：伝える情報の取捨選択

つまり、「やさしい日本語」を知っていれば十分にコミュニケーションが取れるというわけではなく、伝える方法にも注意する必要があるのだということでした。例えば、言葉としては理解できても具体的にイメージができていなかったり、間違った認識をしている可能性もあるため「フォリナー・トーク」を意識することが重要なのだと感じました。私の考えとしては、相手の文化や言語使用の特徴、認識の仕方を知った上でコミュニケーションを取れば相手に合った伝え方が見えてくると思われるため、まずは母語話者が非母語話者に歩み寄って、相手を理解しようとする必要があるのではないかと考えました。

【参考文献】野田尚史「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へー母語話者が日本語を使うときの問題としてー」『日本語教育』158号(2014-8)公益社団法人 日本語教育学会、…

動画教材やレジュメで、日本の英会話教育は人種差別的だということについてお話がありましたが、それで思い浮かんだのが、オンライン英会話教室のサイトを見たときのことでした。オンラインの英会話教室の料金が、講師によって一コマあたりの値段が異なるのですが、フィリピン人の講師だとネイティブ講師よりもかなり低い値段設定になっていました(<https://online.ecc.co.jp/eccstyle/plan/>)。これは日本の中で主にアメリカ英語を学ぼうとしていることが顕著に表れている例なのではないかなと思いました。…

【あべのコメント：オンラインなので現地採用なんでしょうね。国ごとに最低賃金に差があるので、フィリピンの賃金水準にそれなりにプラスした報酬なのでしょう。客からすると、ぎょっとしますね。／つぎのコメントも同じ話題。】

…この料金の差を初めて知ったときに「フィリピン人の英語はアメリカ人やイギリス人の英語よりも劣っているということなのか」と思ってしまった。しかし実際に受講してみて、確かにアメリカ英語やイギリス英語とはまた違った発音の仕方などはあったものの、彼らの英語はとても聞き取りやすく、ほかの国の英語との違いを楽しむことができた。だから、社会的に強い影響力をもつ国の人によるレッスンと料金の差がついていることはあまり良くないのではとその時に感じた。世界には間違った言語など存在しないのだから、あたかも言語に優劣があるように感じさせるようなモノは無くした方がいいのではないかなと思った。

…京都を訪れた際に、お店の人が「おーきに」「おいでやす」と挨拶してくれました。それを聞いたときに、京都に来たのだなと感じました。その土地を訪れた時、その土地の言葉を聞くのも楽しみです。…

【あべのコメント：「おーきに」「おいでやす」って、お店の人からしか聞かない京都弁ですね。】

…「カクチャン」や「フルチャン」という言葉を使う人もいます。「ワンチャン」とは対照的に、確実にチャンスがある、フルチャンスというような意味です。

…わたしは三重県出身です。いわゆる「三重弁」を話しているのですが、「エセ関西弁」と表現されることがありました。関西弁とは近畿地方で使用される方言のことなので、三重弁も関西弁のひとつであるはずですが、それにもかかわらず関西弁といえば大阪弁と考えている方が多いように感じます。それは大阪という場所が三大都市のひとつであり有名だからだと思います。関西弁の中でも有名な大阪弁だけが、関西弁として「正しい」と認識されてしまっているのだと感じました

私は幼い頃、英会話教室に通っていました。その外国人先生の息子さんが、私と同じクラスと一緒に英語を習い始めました。その子は英語が話せなかったのです。当時の私はなぜアメリカ人なのに英語が話せないのか、英語を習うのかと不思議でした。しかし、今なら理由が分かります。彼はお父さんが日本で英語の先生をすることになってから家族で日本に移り住み、それから5年間日本で暮らしていたのです。アメリカよりも日本で過ごしている時間の方が断然長いと本人からも聞いたことがありました。そして日本の学校に通っていたため日本語を話す機会が多かったし、その方がなにかと都合がよかったのだと思います。いくら母国語といっても話さなくなれば忘れてしまうのだと実感しました。そして、母国語をいつまでも忘れないで欲しいという親の気持ちも分かります。そのため、先生は息子さんに英語を習わせたのかなと思います。アメリカ人だから、英語を話せるのは当たり前という考え方はやめようと思いました。…

…地域による言葉の違いについても一つ挙げると、英語の「take」があります。私は、高校二年生の時に学校の海外研修に参加してマレーシアに行ったことがあります。ホームステイ先のお母さんが私にご飯を食べるのを勧めてくれる時に、「ティッ」と何回も言っていて、はじめは何を私に言っているのかわかりませんでした。しかし、朝ご飯、昼ご飯と数を重ねるにつれて私は「ああ、これは私に『take』 = 『取って食べてね』って言っているんだ！」と理解できるようになりました。この時、私は学校でリスニングをしたり発音練習をしている英語だけが「英語」ではないのだと思いました。

【あべのコメント：マレー語の影響のようですね。語尾の破裂音が無音（息をとめる）。専門用語で「内破音」「無開放閉鎖音」というやつです。語尾の子音にむしろ母音を追加してしまう日本語話者には聞きとりにくいでしょう。逆に韓国語話者には聞きとりやすいかも。】

…質問なのですが、文字を持たない言語にも「書きことば」（正しいことばづかいのモデルとされる言葉）は存在するのでしょうか。今回使われている「書きことば」が辞書にのっている「書き言葉」（主に文章を書くときに使われる語句・文法、大辞泉より）と区別されていることは承知しています。しかし、文字を持たない言語に「書きことば」が存在する場合、書くことができないのに「書きことば」というのは、言いまわしが不適切であるように思います。代わりに用いる言いまわしとして「規範のことば」や「きっちりした言葉」のようなあいまいなものしか思いつかないのですが、そもそも話すことの対が書くことである点も疑問です。

【あべのコメント：歴史的に規範化の契機がなければ書きことば的な「規範のことば」は存在しないでしょう。地域ごとのバリエーションがいろいろとあるというだけでしょう。ただし、「こうはいうけど、こんなふうにはいわない」という言語としての規則というものは、それぞれの話者も持っているわけですね。なお、手話言語をのぞき、大体の音声言語は文字表記が開発されています。書きことばとして定着しているかどうかは別として。】

私の出身地では小学生のときの長い休み時間も中・高生のときの休み時間もすべて放課といい、一日の授業がすべて終わったあとの時間を放課後と言っていた。他にも教室を掃除するために机をすべて教室の前や後ろにまとめるときに机をつるといふ言い方をしていた。私が上にあげた二つの言い方が方言だと知ったのは小学6年生のときだった。6年生のときにクラスの担任になった先生が県外から来た先生で、放課という語の使い方や机をつるの意味を知らない先生だった。その先生は私たちに「つるといふのは全国で使われる言葉ではなく、この辺りの地域でしか話されない方言です。ここは皆で集団行動をするいわば一つの社会です。そのような場である地域でしか話されない方言を使うというのは許されません。きちんとした標準語を話しましょう」という内容の話をした。その日から私たちのクラスだけ極力標準語で話さなければならないというルールができた。その先生は今までもそういう指導の仕方をしてきたのかもしれないが、私たちからすれば今まで使ってきた言葉を否定され、とても嫌な気持ちになった。確かに社会に出れば方言は使えなくなるが、小学校という社会ではそこにいるすべての人が同じ方言を使って生活してきたのだから、そこで標準語を使えと強制するのは明らかに自分の価値観の押し付けではないかと思う。自分の世界がすべてだと思わず、私たちが過ごしてきた世界も見るべきなのではないかとも思う。…

…Twitterでいわゆる「バズっている」ツイートの中には「ぴえん」「エモい」「草生える」など度々、明らかに10年以上前に使っている人がいなかったであろう言葉が使われています。あるテレビ番組で「ぴえん」を使った文章を作りなさいという問題が出ており、私はこの「ぴえん」という言葉は問題にできるほど認知度が低い、或いは見かけても意味がわからないとされている言葉なんだなと考えました。このような最初聞いただけでは意味が分からないような言葉は「仲間達との連帯感を高める」と同時に「分からない者は遠ざける」という二つの側面を持っていると考えます。まさに、英語、日本語、中国語…挙げるとキリがありませんが、国際的に起こっている言語問題と同じことです。例えば、英語がそれほど完璧でない日本(語を扱える)人がニューヨークの電車内で日本語が聞こえてきたらどう思うでしょうか。恐らく同じ日本語を使う仲間だと少し安心した心待ちになることでしょう。それと同じように、ネットに精通している人が、小学校でも中学校でも高校でも大学でも、更に、会社の中であっても、馴染みのないところに来て、誰も知り合いがいない時に「草生える」という言葉が聞こえてきたとき、「あ、こいつはネットを日頃から使っている可能性が高い!」と親近感を覚えて話しかけやすくなることもあります。こう見ると、分かる人が限られる言葉というのは便利なようにも思えますが、逆にそれが原因で敬遠される場合もあります。「草」「ワロタ」などの言葉はネットスラングとしてよく知られているために、いわゆる「ヲタク」だと判断され敬遠されることがあります。その為、ネットの中では「草」を多用しても現実世界では一切使わない人もいます(これにはネットスラングであるから、ネットの中でだけ使うべきという立場もあります)。方言、世界各国の言語も同じで、それを使うと自分の出身や立場などがバレるため偏見で見られてしまう場合があります。そもそもレッテル貼りや偏見の問題も包含しているのですが、その場に適応する言葉を選ぶ、「郷に入っては郷に従え」という立場が大切だと考えます。

【あべのコメント：たとえば、2004年ごろのヤフーチャットでは「ほんとかよwww」みたいな表記が定着していました。この「まじでw」の「w」が転じて「草」となったわけですね。もとは2ちゃんねる由来かな。「w」＝「(笑)」の略。現在、「草」というのは中国語にも輸入されていて、日本語由来の外来語としてネット上で流行しています。】

私の祖母は、方言とは違うちょっと変わった言葉を使う時があります。例えば、「舌」のことを「舌ベラ」、「回転寿司」を「クルクル寿司」といったような感じです。その影響で、母も同じように話し、私はずっと「舌」のことを「舌ベラ」だと思っていました。友人におかしいと言われ、違うことがわかりました。これは「ワンチャン」よりも使っている人は少ない(もしくはいない)かもしれませんね。…

【あべのコメント：友人ひとりに「おかしい」といわれただけで、地元で定着している表現を「変わった言葉」あつかいしないほうがいいですよ。クルクル寿司はあちこちで使用されているはず。】

…態度についても先生が岡山弁で話してくださった「みんな ちゃうし、みんな おかしゅーて わやくそじゃ。せーでえーが。」は普段の先生の話口調と違いすぎて人格が変わったかのようにみえた。つまり、方言によって印象が操作されてしまっているということである。関西弁はきつい印象をもってしまうのも態度の問題であるだろう。名古屋弁は汚いと言われるのがとても遺憾である。ワンチャンの派生語でノーチャン(可能性がないこと)や確チャン(絶対的であること)というのもあり私はどれも日常的に使うのだが、どちらか、もしくはどれも使わない人も同じ世代にいてまたその中でも「それはおかしい」という声が飛び交ってしまう。

【あべのコメント：オンデマンド型の遠隔授業ではムダが省略されすぎている気がしますね。対面で授業しているときは、ふざけた口調でどうでもいい話を雑談として追加するので、あんまりまじめな印象をあたえないのですが。カメラを前にして、かしくまっている気がする。/ワンチャンの使用者が多くて、すこしおどろきました。】

私は「じゃん、だら、りん」を使う三河の出身です。でも正直に言うとあまり使うことはありません。特に「だら」は自然と出てくることばではなく、若者が使うとわざとらしく聞こえます。動画で言っていた先生の「言うただらあ」は少しイントネーションが違いました。やはり岡山弁の影響があるように思います。だいたい「でしょ」を使うときと同じイントネーションです。「りん」は「してみりん(やってごらん)」のように使います。…

私の中で、遠隔授業になったメリットの一つに書き言葉の上達が挙げられる。今まで、先生にメールを通して質問をしたり、課題を提出したり、コメントを送ることなど今までなかったため最初の方はすごく難しかった。しかし、授業を重ねていくうちに敬語や文構造のコツをつかみ、相手を読みやすく、もらって嫌な気がしない文章を送ることを心がけるようになった。顔が見えず、直接話せない今だからこそ気をつける必要があると今では身に染みて感じている。…

先日私は出入国在留管理局へ行き、収容されている外国人の方との面会に立ち会うことができました。その際一緒に面会を行なった先輩の話し方がすごく印象的でした。先輩は過去に何度も面会を行なっている方です。先輩は大きな声で、ゆっくりと、明瞭に収容者の方と会話していました。（大きな声でというのは、面会の際には両者の間に分厚いアクリル板のようなものがあるからだと思いますが。）こういった話し方をする先輩を見るのは初めてだったので、面会の時はこのように話すべきなんだと勉強になりました。今思えば、この話し方はフォリナー・トークだったんだと思います。ここでひとつ気になる点があるのですが、先輩は相槌を打つ時に、「そうですよね」ではなく「そうだよな」と相手に寄り添うように言っていました。今回の面会を通して、先輩は敬語で話さないことがいつもより多かったように感じました。これは、精神的に不安を抱えている収容者の方に寄り添うという意味も含まれていると思うのですが、敬語というのは日本語特有のものであると思うので、非日本語母語話者にとってはわかりづらいのではないかと私は考えています。同様に、接客用語も非日本語母語話者にはわかりづらい日本語だと感じます。（例えば袋を買うかどうかを聞く際に、「袋をご購入されますか？」よりも「袋は買いますか？」の方が伝わりやすい気がする。）できるだけ敬語を減らす、または使わずに話すというのもフォリナー・トークなのでしょうか？

【あべのコメント：敬語が複雑すぎると感じている日本語学習者は多いので、相手にあわせて敬語を使わないというのもフォリナー・トークになるでしょう。一方、韓国人の日本語学習者はかなり上手に敬語を駆使します（母語の影響）。逆に、敬語をつかわないと失礼な人だなという印象をあたえるでしょう。】

…話し言葉になると出身でイントネーションが違ったりその地域でしか使われない語尾や表現が存在する。また同じ地域に住んでいても親の話している方言の影響を受けるなどして少しずつみんな話している言語が違うのは当たり前のことだと思う。私の知人は愛知県の三河生まれで東京の大学に進学した。東京の大学でいつものように「だから」のことを「だもんで」と言ったら友人に「だもんでってどういう意味？」と聞かれたそうだ。しかもそこからしばらくだもんでという方言が出てしまったがためにあだ名がだもんでになってしまったので東京の大学に進学するときは方言に気を付けたほうがいい、とアドバイスを受けたことがあった。関西弁などの有名な方言で「せやから」と言ってもあだ名になることはなかったと思う。しかしこのようなマイナーな方言は馬鹿にされるようにあだ名にされてしまうという事実を知って言語には日本語という要素だけではなく方言という言語のひとつとして考える必要があるのではないかと思った。

自分は以前ツイッターで、「文法的には間違っているが意味は伝わる」つぶやきを見かけた際、そのリプライ欄に「この文章は正しくない」という指摘がされているのを見ました。その時は小さいことに拘っていると感ただけだったのですが、今回の資料を読んでなぜこの指摘に違和感を覚えるのか考えました。一つは、この指摘は日本語の多様性を無視しているという点です。自分も他の人も指摘者もつぶやきの意味は理解していました。その文章の意味が正確に伝わるのなら、ある程度の文法のミスは見逃されるべきではないかと思いました。二つ目は、ツイッターは書き言葉で見るべきなのか話し言葉で見るべきなのかという点です。ツイッターは文字を打ち込むので書き言葉と捉えることができます。しかし、ツイッターはしばしば「つぶやく」と表現されるので、話し言葉としても捉えることができます。だから、書き言葉による文法ミスの指摘は適切ではないのではないかと思います。インターネットで使われる言語は、場面によって書き言葉にも話し言葉にもなりうると思いました。

【あべのコメント：近代におこった言文一致運動で書きことばは話しことばに近づいたわけですが、それでも距離がありますよね。ラインやツイッターなどのSNSで「言文一致」が再度すすめられているといえるかもしれません。】

…ある時、県大で授業を受けていたのですが、関西出身の先生が関西弁で話していて、全然なれることができなくて、授業についていけませんでした。基本、違う地域の人と話しても標準化された言葉で話すので名古屋弁以外の方言に触れることがありませんでした。こういった場面に出くわした時のために「地域バリエーションに慣れないといけない」と痛感しました。…

【あべのコメント：当人は夢にもそんなことがあるとは思っていないでしょうね。わかるやる？と思ってるはず。】

今回の講義で「ら抜き言葉」について「ことばの地域差を無視している点」が問題とされていましたが、これがわからなかったので調べました。文科省のホームページ(https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin03/09.html)で答えになりそうな記述を見つけました。「北陸や中部にかけての地域および北海道などでは従来『ら抜き言葉』を多く使う地域がある」とありました。今回の動画配信内でも先生が岡山での使われ方についてお話しされていました。…

…私は以前ニュースの中で、書きことばと話しことばの混合からおきてしまった事件を見たことがある。その事例は3人の女の子が携帯のチャットの中で行われていた会話から起こり、書きことばの世界だった。ある日みんなで出かける予定を立てていたときに、一人の子が文字で「何でくるの?」と尋ねた一文から問題が起きた。送り主は手段を聞いたつもりが、受け取った側はどうしてくるのか、という理由を聞かれたと勘違いし、そこから仲が分裂し、仲たがいが起きてしまったという。これは普段の話しことばをそのまま文字にし、日本語特有のひらがなと漢字が混ざり合っただけで起きたゆえに誤解が起きた悲しい事件である。…

【あべのコメント：文脈で読みが違う場合があり、意味もことなってくるという日本語漢字の問題があらわれたエピソードですね。「何人（なんにん／なにじん）」も誤解の余地が。】

今回の資料の中にあつた、車椅子に乗った障害者に説明せずに介助者に説明する「第三者返答」を読んだ時、私がよく見るYouTubeの「シティネス『City-Nest』」というチャンネルで外国人が日本語で注文しても、店員さんが、隣にいる日本人に確認を取るのが悲しいと言っていたのを思い出しました。（<https://youtu.be/zJWfm1dGT40>）。見た目が日本人ではないから喋れないと思って、また、日本人の方が会話が通じやすいだろうと思って「第三者返答」が生じてしてしまうのだと思いました。店員さんも傷つけるつもりもなく無意識にやっつけてしまっているのだとおもいます。無意識のうちにやっている間はその問題に気づきにくいので、そういう問題があることを理解することが大事だなと思いました。私も接客業のバイトをしているので、こういうことに気をつけていきたいです。

講義資料内で、「英語を学習するにせよ、ほかの言語を学習するにせよ、あなたは、どの地域の言語（どのバリエーション）を学習したいのか。そして、それはなぜか。」という問いかけがありました。私は英米学科の学生で、本来ならば来月からオーストラリアに留学予定でしたが、やはり留学先を決めるときの条件の1つに「英語がなまっていなくて綺麗であること」というのがありました。なので私はカナダやオーストラリアのなかでも割となまりが少ないと言われているメルボルンの大学などを探して選びました。しかしよく考えれば、アメリカやカナダやオーストラリアが起源なわけでもないのに、私はそれらの地域の英語が標準で綺麗なものであると信じ込んでいたのに気づきました。英語はアメリカだけのものではないし、他地域の英語が学びに適していないということは決して無いのに、これまで日本の教育を受けてきた過程や世界の歴史を学ぶうちに、勝手に自分の中で英語の中にも基準や優劣をつけてしまっていたのが恐ろしいです。

私は学校で習う英語（特に高校まで）がアメリカ英語に偏りがちなことに疑問を抱きます。確かにアメリカは今や世界的な覇権国家ではありますが、English speaking country はほかにもたくさんあります。イギリス英語をはじめ、オーストラリア英語、インド英語、ニュージーランド英語などの種類があるなかで、さらにBBCなどが用いるイギリスのRP (Received pronunciation)、アメリカの国土の4分の3を占めるとされているGA (General American) など細かく分けることができ、その数は豊富です。その中で私たち学生は高校までアメリカ英語を学んできました。近年ELF (English as a Lingua Franca) が叫ばれる中、アメリカ英語のみに焦点を当てて学ぶことは果たして本当に大切なのかな、と思います。グローバル化が進み、英語が世界共通語として使用されるようになってきて（それ自体を言語帝国主義として疑問視する議論もありますが）世界中で話者数が増えているのに、一国にフォーカスして学ぶことはいかがなものかと感じます。私自身今までアメリカ英語のみを学んできて、県大の入試では少し苦労しました（県大の入試はイギリス英語で書かれていたので）。特にイギリス英語をリスニングをしているとき、アメリカ英語との違いに驚き最初は何を話しているかわかりませんでした。社会に出て海外と接する場面もあるかと思えます。その国はアメリカのみでは決してありません。多様な言語の形態を学ぶことが求められる時代になってきたので、少なくとも、教育の現場でももう少し、ELFを重視して他の国の英語にもフォーカスするべきだと思います。私は英語教員を目指しています。自分が教師になったら、同じ英語の中にも多様性があるということを文字や音、文化を通して伝えたいです。

参考文献：杉森幹彦、杉森直樹、中西義子、清水裕子 共著『音声英語の理論と実践』英宝社

【あべのコメント：最後に出典を書くだけでなく、記述している文章のなかのどの部分でその出典を参照しているのかを明示する必要があります。なお、出典すら書いていないコメントは何度も指摘してきたように0点です。】

私が小学6年生の時京都に修学旅行へ行っただけで、外国人に「私たちと写真を撮ってもらえませんか?」と英語で聞いて、使い捨てカメラで撮るといふ、自由行動中に絶対やらなければならない行動が学校から渡されたしおりにあった。やはりこの時も、英語は英語は「手段」ではなく、外国人に英語で話しかけるという「目的」になっていた。…

先生がYouTubeの配信で言っていた修学旅行での「英語で話してみよう」について、英語を母語とする人ばかりじゃない。「外国人」だからといって英語を使えば会話ができるとは限らない。英語を母語としない人に対して、「外国人」に見えるからという理由だけで英語で話しかける、こちらの英語学習につき合わせるというのはとても失礼な事なのではないかと思う。旅先の一つの思い出として受け取ってくれる方もいるかもしれないが、「外国人」＝「英語」というイメージは、それこそ「相手に対する先入観のせいで、コミュニケーションをさけてしまうこと」につながるのではないか。

…中学校の修学旅行では、グループ行動中に外国人観光客と英会話しなければならないというミッションがありました。少しインタビューした後に地元を紹介し、ご当地キャラクターのシールを渡して一緒に写真を撮ってもらうという流れです。学校に外国人を招いて事前に練習したり、振り返りの時間が設けられていたり完全に目的化されていたことを思い出しました。

【あべのコメント：「学校に外国人を招いて事前に練習」というのを読んで爆笑しました。おもしろすぎる。】

日本語の大幅な表記変更として、右から左へ書く書き方から、左から右へ書く書き方になったことがあげられると思う。戦前は左から書く書き方が主流だったにもかかわらず、変わっていったのは、やはり欧米の影響であろう。表記が変わった理由について、河野友見さんの「なぜ戦前の横文字は右から左に書くのか？」(<https://www.excite.co.jp/news/article/E1322038604526/>)という記事内では、英文と和訳を並べて書くときに同じ方向にして見やすくするためであり、また外来語の多い文書の影響によるものだと紹介されていた。…

【あべのコメント：肝心なポイントがぬけてますよ。そもそも日本語は縦書きが基本だったわけです。看板など、限定された場面で横書きすることがあったわけですが、そのとき縦書きのとおり右から左に書いていたわけですね。それが左横書きが定着していったと。その理由は欧米の言語にあわせたといっているいいでしょう。アラビア語など、右から左に書く言語はパソコンで対応できなかった時代もありましたが、いまではツイッターでも右から左に書けるようになっています。文字・表記体系とパソコン（情報技術）というのも、なかなかの一大テーマです。表記改革の歴史も。】

…私は最近独学でタイ語を勉強し始めたのですが、気付いたことがあります。それは単語と単語の間にスペースがあるだけで随分と理解しやすくなるということです。今期受講しているギリシア語にとってもこずっていましたがタイ語を勉強したあとだとギリシア語が簡単かもって思えるのです。日本語にはアルファベット表記「I like dogs.」のように書く文化がありません。「わたしはいぬがすきです」のように表記する、話すことは外国語としての日本語学習者に対してよりやさしいコミュニケーションになると思いました。…

私は高校時代に速記部に入っていた。速記の大会では、朗読された文章を速記文字で書き取った後に、日本語（ひらがな、カナカナ、漢字交じりの文）に直す反訳といわれることをして自分が反訳した文章が読まれた文章と何文字違っていたかミス数を競う。部室には何代も前から受け継がれた速記用の朗読文がたくさん保管されているのだが、その中には速記の必要性について述べられたものがあつた。コンピューター技術が発展した今、速記はもう必要ないのではないかという意見に対して、現代においても方言や話し言葉をコンピューターが正確に記録することは難しく、速記の必要性は見直されているというような締めくりだった。確かに聞いた音をそのまま書き取る速記の場合は言葉の音が変わらない。逆にコンピューターなどで音を文字化する際には方言や話し言葉が自動的に正しいかたちに予測変換されてしまう可能性があるのかもしれないと思った。ワードでも「してた」と入力すると二重の下線が引かれて正しくないことを伝えてくれるが、速記では読まれた文章が「してた」という音であれば反訳でも「してた」と書かなければならない。勝手に「していた」と直すとそれは速記者のミスとしてカウントされてしまうのだ。速記はある意味で言葉のそのままの表現を大事にする技術なのではないかと考えた。…

言葉は話し言葉、書き言葉に分類され、書き言葉が正しい言葉とされることが多いと資料にありましたが、話し言葉に限ってもたくさんの種類に分けられると思います。例えば、ニュースでは日本で標準語とされる言語が使われています。しかし、バラエティー番組では、その地方・タレントの方言や、崩した（ラフな）日本語が使われています。時間帯や番組の雰囲気に合わせて使い分けられていることが分かります。ニュース番組の厳格な雰囲気とバラエティー番組のワイワイした雰囲気を比べると、ニュース番組の言葉が正しいものだと思ってしまうと思いました。もちろん正しい言葉づかいではあるかもしれませんが、方言などのマイノリティの言語が排除された言葉づかいであり、無意識に排他的な言葉づかいを学ぶことにつながるのではないかと思います。

【あべのコメント：あちこちで「方言ニュース」というとりくみも、一方ではありますね。】

―――

授業資料の「おのおのの国内でどれがスタンダードであるかは、力関係によって決められる」というところを読んだ時に、イギリスの「マイ・フェア・レディ」という映画を思い浮かべました。去年はじめてその映画を見たとき、貧困層だった主人公はひどい訛りを言語学者の人に直してもらえてよかったなとしか思っていなかったし、ハッピーエンドだと思ったのが正直な感想でした。授業資料を読んでからは、この映画の内容もこれに当てはまるのではないかと感じました。貧困層が話す英語が正しくないわけではないのに、富裕層のスタンダードの英語を教え叩き込むのは、自己中心的な行為だと初めて気づきました。しかし、スタンダードな言語が話せるか話せないかで社会的立場に違いが出るのも本当だと思うし、スタンダードな言語を話す人がそうでない人に教えるにあたって、悪意があるとは思えません。だから、映画のようなどこにでもありそうな行為を全て否定することもできないので、何が正しいのか判断するには難しい問題だなと考えました。

【あべのコメント：ジョージ・バーナード・ショアの『ピグマリオン』は1938年に映画化され、1964年には『マイフェアレディ』という題でも映画化されました。日本でもパロディ的な『舞妓はレディ』という映画があります。しかしやはりバーナードショアの原作がいいです。映画ではラストが作者の意に反して、ねじまげられています。】

―――

私は英語を学校の授業とは別に自主学習しているのですが、アメリカ英語を中心にいろんな国の使い方を覚えています。その中で特に面白いと感じたのは、オーストラリアで使われるThank youをTa!と略すことです。なんだか響きが良いです。そんな風に勉強していく中で知ったのがシングリッシュです。今回の授業で思い出したので、調べてみました。シングリッシュはシンガポールで使われている現地なまりの英語です。発音や文法にかなりの特徴があります。

(参考ページ：<https://www.rarejob.com/englishlab/column/20190422/>)

私はこのシングリッシュがシンガポール政府によって「正しい」英語に矯正されているという話を以前に聞きました。シングリッシュは規制がかかる場面があるそうです。でもすごく現地に根付いている言葉のようなので、無理矢理矯正するのもどうかと私は思いました。やはりシンガポールは小さな国だし、大国への負い目から正しい英語に直したくなるのかなと感じました。

【あべのコメント：オーストラリア、アメリカ、イギリスなどに留学する人も多いでしょうからね。】

―――

…わたしはフランス語学科ですが、フランス語は日本語と異なっている部分が多く難しく感じます。「英語」は小学校の頃からやっていますが、いまでも外国の方とスラスラ日常会話ができるかと聞かれたら自信がありません。それは英語で話すときには、自分の中で間違えてはいけないという意識が強いからではないかと思います。日本の言語教育では文法はともしっかり勉強しますが、会話がとても少ないように感じます。文法ができるということは強みだと思いますが、言語は会話で意思疎通するためにあるものではないかと個人的に思っています。文法で機械的に覚えることは、シャイな日本人にとっても合っていると思いますが、幼少期から会話の授業をもっと増やし間違えることに対する「嫌だな」と言う気持ちを軽減させることに力を入れるべきではないかと思います。

【あべのコメント：インプットが圧倒的に不足しているから以外の理由はないでしょう。話しことばをどれだけ聞いてきたかです。聞いてないのに口からでてくるわけがない。「terrific」さえ聞いたことがない人がほとんどのようですからね。逆に、映画ばかり見ていればパツと話せます。もちろん、ただ聞けばいいのではなく、聞きとることが大事。】

―――

…私の高校は各地域から生徒が集まっていたため、友達同士で方言の違いを話す機会がよくありました。ある時、関西弁を話す友達が「関西弁はきつく聞こえるから、共通語を話す人がうらやましい」と言っていました。私は、関西弁はきつく聞こえる部分も含めて親しみやすいと感じていたので共通語を羨ましがる友達に少し驚きました。この出来事をきっかけに、共通語と関西弁では話し手が聞き手に与える印象がどのように異なるのか知りたくなりました。

論文「共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討」(https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpsy/84/1/84_20/pdf)を通して、顕在的態度に関して大阪方言の話者は共通語よりも暖かいと評価される一方、共通語の話者は大阪方言よりも知性が高いと評価されていることが分かりました。以上より、話す人へのまなざしはその人の話し方によってこんなにも異なることに驚きました。私は今後、相手の話し方だけで「○○方言を話す人は怖い」などとネガティブなまなざしをむけてをいないか特に注意したいです。

高校時代の遠足で京都と奈良に行ったとき、グループで外国人3組以上と英語で会話をするという企画がありました。英語を本格的に話す国はイギリスやアメリカだろうと私は漠然と考えており、これらの国出身に見える外国人に話しかけた結果、私のグループが話しかけた外国の人は、全員白人でした。今振り返ると、英語を話すその他の国の人を全く考慮していませんでした。

今回の授業資料に記載されていた移民二世の言語使用の話について、私はゼミでヨーロッパの移民問題についての書籍を読んでいるので、少しコメントしたい。その本によると、移民2世が母国の言語を話さずホスト国の言語のみを話すようになることは、教育機会の問題であるという。移民の受け入れに寛容でない国、移民の受け入れはするが差別化する国、受け入れもするし生活面の保障もするが彼らのアイデンティティは考慮しない国など、国によって移民政策は様々である。このことからわかるのは、仮に母国の言語を学びたいと思って、も学べない人がほとんどであるということだ。ホスト国における母国の言語教育の機会を求めてデモなど具体的な行動を起こす人もいるくらいである。本当に母国の言語の価値を低いと思っている人がどれ程いるのかわからないが、決して多くはないのではないかと、思う。

参考文献：宮島喬『現代ヨーロッパと移民問題の原点：1970、80年代、開かれたシティズンシップの生成と試練』明石書店、2016年

私は今回日本の英語教育について考えました。日本には英語の勉強が嫌いだ、英語を話すことができない、苦手だという人が多いように感じられ、この原因は日本の英語教育にあるのではないかと考えます。まず、日本の英語教育は暗記科目になっており、苦手意識をもつことに繋がっているような気がします。文法等を暗記してもコミュニケーションをとることができる会話力は身につけません。もちろん文法や単語を覚えることは大切ですが、実際に私たちが日本語を話せるようになるために文法や単語を意識して暗記はしていません。それは日本が流れる環境で無意識のうちに身につけていったからです。日本の英語の授業は学んでもそれを使う場所がなく実践的に身につけることができないことも原因の一つだと思います。現在は外国語活動が小学校から実践されていますが、これが本当に将来役に立っていくのか、コミュニケーションをとることができるようになるのかは疑問です。

【あべのコメント：じっさいに構文をたくさん暗記できていけば、しゃべれます。自然と口からでてきます。暗記が悪いなどというのは空論です。使う場所がないとかは無関係です。時間を投資すればしゃべれます。暇さえあれば英語を聞いているというレベルで英語に接していない人が、しゃべれるわけがないんです。言語学習を甘く考えている人が多い。聞きとりはできても、しゃべるのは2語文、3語文程度だというレベルから、使える構文をふやしていくことが肝心です。そもそも初歩の初歩である聞きとりができていない人は、聞き量が不足しているんです。それだけのことです。英語は嫌いだ、苦手だと思ってる人のインプットの量なんて、ほぼ0に近いんですよ。やる気のある人と比較すれば。】

私は塾講師のバイトをしており、中学生と高校生に英語を教えている。生徒に「なぜ英語を学ばなければならないのか」と聞かれると、「これからの社会では英語力が求められるから」と答えていた。つい最近同じ質問をされたため、同じように答えると、「具体的にどんな場面で使うの」と聞かれた。私は答えられなかった。将来どこかの企業に就職する時や道端で外国人に会った時、洋楽を歌ったり聴くときに使うと答えようとしたが、生徒の質問の本質である「なぜ他の言語でなく英語なのか」には答えられていない気がしたからだ。「英語が主流」といってしまえば納得できてしまうが、まずそこで納得できてしまうことを問題視していくべきだと思った。また、「なぜ英語を勉強するのか」というのはだれしもが一度は考えることなのに、学校で真剣に答えられることは少ないように感じる。「なぜそんなことを聞くのか」という目で見ると教師も少なくない。規範というものの持つ力の恐さを改めて感じた。

【あべのコメント：納得できないことを「やらされている」という状態で語学が身につくはずがないんですよね。むしろ大学に入ってから自分で選択した言語のほうができるようになることが多いです。やる気がちがうから。もちろん、「必修単位だから」という人は身につかない。】

私のアルバイト先にはたくさんの外国人がアルバイトをしている。その中でも特に多いのがネパール人である。ネパール人は基本的な日本語は話せるが、日本語がわからないときは英語で私に聞くことがある。

私は高校までは「学校で学ぶ英語」は得意であったため、スムーズではなくともある程度の会話は英語でネパール人とできる。しかし、たまに彼らの話す英語は私が今まで学んだ英語とは発音が違い、何度も聞き返すことがある。それは、日本の学校で学ぶ英語はアメリカ英語で、ネパールの学校ではイギリス英語を学ぶからだと言っていた。...

【あべのコメント：インドでもイギリス英語の影響がおおきい英語が話されているようです。イギリス英語では一般的な協調表現の「bloody」が使用されるとか。】

言語の本来の機能、役割からすれば、正しく情報が伝達できる発話や筆記は全て正しいのでしょうか。ということは、逆に言えば、どんなに規範文法に則った発言でも、回りくどかったり、難しい語彙で着飾ったりした発話は正しくない、と規定できるのでしょうか。

【あべのコメント：むかし、ある政治家の発言に関して「言語明瞭、意味不明瞭」と評するのが流行しました。文法的に正しくても、コミュニケーションとして、あるいは情報伝達として「よくない」表現はたくさんありますね。】

私は教職の講義をとっているのですが、教科教育法の講義で、言語帝国主義について学びました。英語を教える身として生徒がなぜ英語を学ばなければならないかを伝えるときに、英語を話しているとかっこいいから、とかアメリカ人が話す言葉だからとか特定の国や地域の人を社会的優位者にさせるようなことは言うてはいけないと学びました。また、英語が世界中で学習対象としてまたは第二言語としてあるのには過去に英語圏の植民地となった土地があることなどを念頭に置かなければいけないと思いました。英語のを教える立場になるには英語の文法だけでなく、英語そのものの歴史なども学んで、正しく生徒に伝えなければならないと思いました。

【あべのコメント：すてきな教員さんですね。いいことをおっしゃる。】

私は、外国語学部でスペイン語を勉強しています。実際、授業を受けていて、メキシコなどラテンアメリカ出身の先生がスペインで作られたスペイン語の教科書の表記に、これは私の国では使わない表記である、という指摘をすることがよくあります。今まで、私はこう言われてもどちらを使えばいいんだろうと思っていましたが、今回の授業で「どちらの発音をあなたが勉強したいかを決めるのは、言語学的なことではなく、政治的なことである。それはあなたが誰に話したいかという問題である」という言葉を聞いて、自分が使いたい方を、今後使っていくであろう方を自由に使えばいいのだと納得しました。

【あべのコメント：できれば、ひきだしのなかにしまっておいてください。いざというときに理解できるように。】

私は英米科に所属していますが、今でも韓国語そして韓国について学びたいと思っています。志望校を決めるとき、韓国について学べる大学を探しましたが、とても少なく、親、先生、友人の反対もあり今愛知県立大学に入学しています。親は、外国語を学ぶなら将来役に立つからという理由で英語か中国語にしろと私に言います。逆に韓国語は学んでも意味がないからやめなさいというのです。友人も、先生も全く同じ意見で私に反対しました。先生には「どうせ韓国ブームに乗って勉強したい気分になっているだけだろ」とまで言われました。どの言語に価値を置くかは個人の自由であると思いますが、誰かがある言語を学びたいと言ったときに、自身の価値観でその人の学びたいという気持ちを傷つける人がいることが悲しいです。私にとって英語も中国語も韓国語も大切なものです。「学ぶ価値がない言語」は存在しないと思います。ですが、愛知県立大学でも韓国語を学ぶことができるのは3年生からです。第二言語の選択肢の中に韓国語は含まれていませんでした。早く日本の大学でも韓国語が当たり前のように第2言語に含まれる日が来ることを願っています。

【あべのコメント：経済の論理で価値があるなしを判断するような視点が定着してしまっていますね。しかし「将来役に立つ」などという、ぼんやりした発想で学習動機になるかという、わたしは否定的です。「学びたい」という意思こそが重要です。意欲さえあれば独学だってできます。楽しいと思えない語学で身につくのは初歩の初歩だけです。】

言語態度に関して、私は少し苦い経験をしたことがあります。私は両親が関西出身でしかも小さい頃は和歌山の南の方で育ったのですが、小中校は愛知県だったため、人と話すときにイントネーションが混ざって独特になることが多かったです。また、言葉遣いも例えば、「こぼす」ことを「うちやげる」と言ったり、「行こう」を「行こら」と言ったりします。それでも一緒にいた友人は、珍しそうに方言について楽しく話していたのですが、あるとき大阪から来た子と話をしたときに、「エセ関西弁」と言われ、非常にショックでした。これは自分の使う言葉に対するアイデンティティが強すぎて、他人が自分の地域が話すことばと似たことばを受け入れることができているのを感じました。また、現在では多くの若者言葉と言われることばが使われていますが、それも美しくないと否定するのではなく、それも新しい日本語であると認めることが大切だと思いました。

【あべのコメント：まさに「ちょっと似ている」からこそ違和感を強く覚えて否定してしまうというやつですね。】

…今習っている言語で現地の人とコミュニケーションをとる為には、ただ机に向かってがむしゃらに勉強するだけでは到達できず、言語の壁は本当に高いと改めて感じた。

【あべのコメント：フォリナートークが上手な人とは、一対一では会話は成立しやすいのですが、こまるのは、5人くらいいるうち自分以外はみんなネイティブという状況です。途端に理解できなくなります。だって、そもそも話題の文脈を共有していないのですから。でも、そのときに感じるさみしさを学習意欲に転じることもできます。】

「第三者返答」について実際に経験したことがある。私は介助や介護を受けているという意味で弱者ではないのだが、海外へ行った際に弱者という立場になった。引率で連れて行ってくださった方は英語がペラペラだったが、私はあいさつ程度の英語しか頭から出てこなかったため、会話が思うように膨らまなかったり、問いの意味が分からなかったりすることが多々あった。初めは積極的に会話をしてくれようとした現地の方も、次第に会話が続かないからか喋りかけてくださる回数が減っていった。そして、私が引率の方といるときはいつも目線がそちらに向いておりとても悲しい思いをした。疎外された気持ちだった。そのため、話しかけるのにもためらうようになった。私は、言語の重要さを身に染みて知り、海外にいと「言語」が通じない人はコミュニティから外されていく可能性があると感じた。だがそれは、日本での介助や介護を受けている人たちへの対応とは別問題でそのようであってはいけないと感じた。彼らは同じ言語を知っているからである。時間をかけて、コミュニケーションを図るべきだと思う。目線だけでも配ることを忘れないようにしたい。

おまけ：他者への期待と支配欲のはざままで

子育てや教育など、どちらかにだけ判断力があるとされている場合、「相手を意のままにしたい」という願望をもってしまいやすい。「このようなときは、こうするものだ」、「そうじゃない、こうだ」というように、一方的に相手の行動を制限し、どのようにふるまうべきかを教えさすことがある。そして、相手が自分の話を聞かないときには、強く怒りを感じ、声をあげてしまうこともある。そのようなことは、友人関係や恋愛関係などでも生じることがある。ただし、他者に対する期待がある。それは、「こういうときは、こうしてほしい」という期待である。その期待が過剰になると、問答無用の支配になってしまう。

ここで紹介したいのは、「「コミュニケーション障害」ってなんだろう」というコラムで紹介した自分自身の体験である（あべ2015:65-74）。知的障害者の施設で勤務していたころの経験を書いたものだ。文中の自閉者とは自閉症の人のことである。

わたしは、自閉者と接するようになった当初、「なんてこの人たちのコミュニケーションは自分勝手なんだろう」と感じたことがあった。それが「わるい」とおもったのではなく、ただそう感じたのだ。

そして、しばらくして気がついた。なぜ、わたしは自閉者を「自分勝手だ」と感じたのだろうか。それは、わたしが「このように接したら、このように反応してほしい」と期待していたからであった。「このようなとき、人は『ふつう』このように反応するものだし、それが当然だ。そしないのは勝手だ」。ごうまんにも、わたしは、そのようにかんがえていたのだ。

そこで、わたしの頭はひっくりかえった。「なんてわたしは自分勝手なコミュニケーションをしていたのだろうか」と、むしろ自分の勝手さに気づかされたのだ。文化人類学の用語でいえば、わたしは自文化中心主義にとらわれていたのだ。わたしの常識は、自閉者の非常識であり、わたしの「ものさし」を、身勝手にも、おしつけていたのである（66ページ）。

発想をひっくりかえすこと、視点をずらし、ちがった方向からものごとをとらえかえすことで、見えてくるものがある。自分を「ふつう」に位置づけているからこそ見えなくなってしまうことがある。ちがいに気づくこと。そして、自分が当然のように思っていたことが「あたりまえ」ではないことを知ること。自文化中心主義は、あちこちにあら